

音義學

音義學は古來學者の意を注ぎし所なれど何れも大成するに至らず、唯其一端に止り一科の學とするに足らず、爲めに世に知られざるは憂ふべき事なり、然に富樫廣蔭此學を創め門人堀秀成其業を繼ぎ其著書數十部を遺したり、此に一科の學とすべき價値を有するに至れりと雖未創業の際、後來學者を俟て見開する所あるべきあり、どもあれ此學を研究するは尤も興味ある業なるは、免かれざる所なり。

五十音圖に付ては我國固有か傳來かとの二説に分れたるが、蓋悉曇傳來とするは誤なり、松村春雄の神語考に悉曇の古書なる大日經字輪品金剛字母品文珠間經字母品等には一つもなく、稍後の三密抄より見よ初めたりとあり、又眞淵の萬葉頭書にも同説を稱したり、悉曇は智證空海兩僧が入唐して初て傳習したるより、我國に弘まりたる者なるに其以前續日本紀和銅六年五月の詔に、畿内七道諸國郡郷各著三好字並用三二字とありて、備中國郡爲都宇郡筑前國毗郡爲毗伊郡薩摩國穎郡爲穎娃郡など、伊韻の一段の音には其母子なる伊の音の假字を副へたり、此外例多し、五十音の位置自然世に傳はりたる證とすへし、又藤原不比等の孫濱成光仁天皇寶龜三年五月七日謹上とある古寫本歌經標式と云へるは歌に韻をふみて作る例を、古歌を證として示したる書なり、斯く悉曇學傳來の前に、阿伊宥衣於の五韻をふみて歌を作れと云ふ敕撰の書あり、五十音圖なくて阿行の韻を知る事を得べきや、鈴木重胤平田篤胤も同説なれど本居宜長のみは、音韻學も詳しく於乎の假字の誤をも

正しなから、前諸説に反せしを以て世の國學者悉曇より傳來し者と思へるは非なり、抑五十音圖は國語の本源なり、國語之によりて獨立し國体の尊嚴を保ち、國家として國民として國語を尊重すべきなり、春庭の詞の八衢に國語の五十音圖によりて活用するとを明したり、世に韻鏡學者と云ふ者あれども漢吳音と國語とを交へて、祕傳口授なごこと、敷云ひしものから、其學も世に廣まらず、五十音の排列は今世に在るを正とす、中古略本和名抄以來圖毎に經緯の位置異なりて種々の圖ありしが何の間にか復古して今世のものとなれり、五十音圖經緯の位置に付きては、單に唇舌齒牙喉の同韻同位にだにあれば何れにても各人の意にまかせて圖を作りしものならん、篤胤古史本辭經に良行と和行とを置きかへたは甚非なり、良行は上につく者ならねど和行と阿行は相對的にして、又表裏の關係あるものなり、即阿行の宥はウンと云ふて息ふき回したと云ふ發聲の時、和行の宇は絶息の方にしてウンと云ふて轉返りたりなど云ふが如し、斯く縦には種々位置の差ありて横には其位置の差を見ざれども五十音圖の異種は只に十五六種に下らざるなり。

阿行は言詞の下に屬くことなく、重りて下に屬くときは必ず脱出して其音を云はざることをなれり、即
ウカアノラ ムラカ 高天原、ウラヒ 腹赤、ウラヒ 鹽
ウラヒ (以上阿音)
ウカヘ 我家、オホチ 大市、アカン 明石
ウカヘ (以上伊音)
ウカヘ 尾土、オシミ 忍海、ヤシロ 山背
ウカヘ (以上宥音)
ウカヘ 風音、カサネ 淺茅生、ヒキ 日置
ウカヘ (以上於音)

の如く高と云ふ語上に屬く時は、自ら天の^アは脱してタカマと云ふなり、而して和歌に字餘と云ふのは阿伊宥於の四とし、衣は例なしと學者の云へるは國語中衣の音は韻になるのみにて、言詞とはならざる故なり、川北丹靈の加奈布具志に詳なり。

良行は阿行に反し上に屬くことなし、蘭の花と云へば國語の如なれど、字音なるは明なり、而して阿行良行共に一音にて言詞となることなし、大祓詞に畔放と云ことあれど之は阿背の略されしにて、唯阿と云言詞なし、良行も亦之と同じく一音にて言詞とならず、また阿行は下に良行は上にづくことなきを以て、十行中一つかげて九行となり、九行九度重り合て言詞八十一章をなす、其中衣音は言とならぬを以て衣列音は言詞となることなし、中古の言にむせと云ふ言あれどこはいせの轉なるべし、(後に其證をあげん)

又良行は言の下には意なく副へて言ふことなり、櫻、柱、枕などのラの如し、前に言へる八十一章(一段五言一章二十五言)二千二十五言と、加佐多奈波麻夜和は一音を以て一言をなすを以て、之を加ふれば二千六十五言となる、これ日本國語の語源の數なり、(衣音の數を除くべし)此外國語には平上去の三聲ありて同音を區別す箸橋端等なり、入聲は國語にはなし、故に二千六十五言の三倍六千九百九十五言となる、此外良行の音に意味なしに副ふを以て、例は箸、橋、端の三同言の外に良音を副へたる柱となる如き詞二〇六五を加へ、八二六一〇となり、また合言となり假言となり通畧延約等となりて益其數を増すものなり、

國語の語源を西洋又は印度支那朝鮮語源と同じと云ふは、學病の極にして獨立貴重の高天原人種をあらぬ蠻俗の後ならむなど、我祖先我國体を汚す愚言を稱へ、鼻うごめかすは狂の極とやいはん、我國語は我國語の學問即音義學によりて講究し、世界の言語を學べて我國語の靈妙なる活用の助にすべきあり、阿行より云はんに古來阿音を原音とせるは、甚非に、宥音を原音とし於阿衣伊と順出せ

るなり、幼兒初めて音を發するは閉ぢたる口を開かんと聲を發し、來る順序なれば、先宥音を發し次に空々口を開きて阿行となる、心を注めて聞けば幼兒の聲はウーアと聞取らる、にも著く口を閉おて阿音の出でぬは自ら發聲しても知らるゝなり、幼兒の初て言語をなすにウマと云ふも自ら宥音なる原音を示すなり、阿行の宥はより發して和行の字に終るが、人の聲にて出聲と引聲イツルコエ即ち生と死との別あり、此宥を原音とせるは富士谷御杖始めにして、篤胤も宥を原音と定めたり、

宥音は眞直に喉より發し阿は頤に昇りて衝當り頤の方に降り、於是頤に觸れて頤に昇る様あり頤頤の作用なくして宥音は發するをもて、原音たる疑なし、阿行定りて再宥を原音として、久須都奴不牽由流字の九音を生す、之を父母とし阿行を母音として、即久阿の音加久伊支久衣介久於古生して加行定る、同様にして父音を母音と合して他の行をも生し、五十音其位置をなす、發音上注意すべきは阿行の伊宥衣於夜行の以延和行の章字惠乎の十音なり、阿行の音は單直にして由加はりて夜行の以とも延ともなるなり、

和行には字音加りて韋惠乎となる、故に其含まれたる父音を此發音すべきものにて、自ら發音に差別あり、中世より發音亂れ阿夜和の三音相混じ假字をも差別なくならんとする、今にして、之を正さざれば國語の眞意義をも解し得ざるに至らん、而して阿行の宥と和行の字は早く古事記万葉時代より差なくなりたれども、古言の上に證とすべき者存す、即天宇受賣命の字は他に於受賣とも云ふことあるにまじり、宇は和行ならずして阿行宥なり、宇陀伎もいたくと宇都久志もいつくしと云ふをもて等しく阿行なり、和行の宇は現ウツをヲツと菟ウサギをヲサギと云ふ例なり、こは前に説きし如くに發音

上にも差別あることなり。

阿行の他の音に異りたる点を擧ぐれば。即一音にて語をなさず、下に屬かず活用語とならず、開口音にして濁とならず、他の四十五音の原韻なることなり、加行は其音に男質ありて男子の名稱となり、

麻行は其音に女質ありて女子の名稱となる、即ち左の如し

加行男統神漏岐、伊邪那岐、老男、童男、男、彦、
麻行女統神漏美、伊邪那美、老女、童女、女、姫、

而して加佐、太、波、行は共に物音となる、加行のは金石の音にてカンキンケンケンコンと響き、

太行は糸竹の音にてタンチンツンと響くにて知べし、佐行は輕き物音にて細き小き物の音、即

兩のサと降り砂のサラと音すると云ふ如く、波行も亦輕き音にて薄紙又木葉の如き物の音、

即ハラとヒラと云ふにて知るべし、例へば古事記允恭天皇の段に佐々婆爾宇都夜行良禮能。多

志多志爾とあるは霰の竹葉を打つ音、萬葉五に鼻毗之々示とあるは噓の音波行にて輕音なり、枕草

子に車のさしとあるは、加行にして車の軋る音なり、此外例いと多けれど省きつ、佐行はわざ

とする義あり、良行はこれに反し自然の義となる、散降照等は自然のなれど、佐行に轉じ散降す

照すと云へば使然的となる、之れに反し良行に轉すれば、當重清等の使然的話は當る重る清ると云

ふ自然的の語となりたり、

太行は強音なるをもて強く又殊更にする事はツルと云ひ、奈行は弱音なり故に穩に或は自然の事は

ヌルと云ふ例ば見つる聞つるは殊更に見聞する事、見ねぬる聞ねぬるは自然的なるが如し、故にな

がくし日を今日も暮しつとは殊更に暮したる事、ながくし日の今も暮れるとは自然となるな
波行は阿行に似たる所あり、こは後に更に云はん、

論

麻行に活用する語は形容言志支久に活用す、進の^{スマム}スサマシク スサマシキ スサマシ悪の^{ニク}クマンニ
クマンシキ ニクマンシクとなり、志支久は麻行に例は黒廣等はクロメクロムヒロムヒロムとなる等
なり、良行は意義なし、野良貴支呂等の如し、又物音となり動かす物の形容となる、カラくニコ
くサラくニクルくスルく等云へるをもて知るべし、

説

和行は阿行の反なり、阿行の宥は進の始和行字は退の終阿行於は大和行乎は小の義、阿音は廣大な
る周圍和行は狭小なる輪の如きを云ふ、阿行伊は上に昇りて動き、和行章は下に在りて静まる義あ
り、
阿列此列の一音を率ゐて他行に轉ず、彼にありて、未だ此に至らざる意あり、故に未然言なり又助辭
をかけて請求の意となるも彼れにあるを此へ得んとする義なり、

伊列云居て言とあす、かすむを霞とし、けむるを烟とす、物の成整し定る義を具ふ、過去なり其跡をの
こさず形見わさるか云へるなり、キシの助辭も此列なるを思ひ合すべし、

宥列定りて現在となる、阿列の未然が治定する義となるは現在なればなりと知るべし、
衣列は已然なり、宥列は我自らなすが如けれど衣列は我爲す事を爲令る義行け致せ學べ等なり、

於列此列には諸活用は及ばせ、但來と云ふ詞一ツコキククルクレと活用けと、是は發音上調子カキ

をゴに轉じたるにて、キキククルクレ云ふべきにて古くは此後の方用ゐられたる例多し、

右にて五十音圖に言詞の作用定則等自然に備はりたるを見るならん、今一音ごとに義を具へて事物の体用を顯はせることを古言に徴し論すべし、

父音久須都奴不牟由流宇と母音阿伊有衣於の十四音は、各音に五義及び二三の末義を有し事物の名稱作用を言詞に顯せり、他卅六子音は各二音に父母音の交かなる意を有し、各固有の意なき也、例ば加音は父音久と母音阿音との合音なれば阿の義と久の義とを加音の義とせるが如し、世に一音一義と云ふ人あれど一義にて千萬言の意を盡す可くも非ず、例ばオホツカナシ オホロケ オロカなどの於音と、オコル オフ オホ オホクなどの於音と同義なりと云はゞ、又アメアマ アマテクなどの阿音とアツキアデカモアデアデサキなどの阿音とは、大小の差別あるが如く聞ゆるに非や、斯く同音異義の言詞あるを一音一義とし解くは細を欠ぐ、況や一行一義と云ふ説は論するに足らず、荒木田守訓林國雄平田篤胤大國隆正鈴木重胤等音學を稱せしも皆一行一義或は横韻にも一義ありとの範圍を超えず、其疎なることを知るべし今此に説かんとするを各音聲の起る貌より推究して語源に逆りて其眞義をどくものにして即ち音義學と云ふ一科の學たる所以にして、實に其大成の創始は大に堀秀成の功に負ふ所なり、

凡る萬物萬事の体用を音聲に顯はして言詞となるは、其音聲の貌によるものなり、即細く鋭く進む象ある物は須音^スと云ふ、薄^ス杉^ス菅^ス筋^スなど又進む鋭く摺る等にして、衝突する象の物は都音^ツを以て云ふ突^ツ積^ツむ束^ツの塚^ツ杖^ツ洋^ツ等なり、以上の詳細は堀秀成の左書によりて音圖より章を別にして説くを

三見式、
音圖大全解

(五十音圖を詳解す)

音圖余論

(五十音圖に付ての諸大家の説を論ず)

音義本末考

(音義の發音より其貌に本末あるを詳論す)

類語索例

(凡ての類語を見出すに便にす)

語法本義論

(文法の本義を音義によりて説く)

古言類苑

(八十一章法にて古語を類苑したるもの)

助辭音義考

(天爾遠波を音義によりて説く)

斯く説き去り説き來りたるものは只音義學の概論に過ぎず、去れば音義學にて數萬の言語を首尾全く説き解するを得るやと疑ふなるべし、故にこれが開論として覺り安き動詞の一二を音義學にて説き進で天爾遠波の詳解を古歌に證して説かんとす、

加行に活く詞は身体手足を動かして爲す業の類を云ふ撥開、行歩、磨、研、突、毀、泳、彈等例たり、

佐行は先方へ進むる類を云ふ差押渡、及、平寄放、飛、徹等にて知るへし

太行は物に強く當り或は事を強く爲る類を云ふ放閉立勝落當打捨斷等なり

奈行は太行の反對にして物の和ぎ合ふ類を云ふ兼去束統等と云ふ

波行は麻行とともに心情の作用を云ひ麻行に對し些か緩なり思、忍、戀、慕、憂、學、問、願、教など

麻行は波行に對し心情の些か強き意なり恨、妬、猜、惡、羨、悲、愛、責などす

夜行は物事の和かに緩かなる様消燃癩老萎等なり

良行は加行に對しいぢくか動く差別あり散降昇下流亂荒振破等にて加行に參照すへし

和行阿行に對し前に云へる如く終りの結なれば居る義あり植居用率餓等の活にて覺る可し

斯く加行より佐行に至る迄各行に活く詞に各其行毎に定義あるなり、而して阿行は各音に五義宥列も亦各音に五義ありて其外の子音は此母子音の交合になるを以て其母交合せる母子音の義を自れの音の義とせりとは前にどけり、今例として。

○心ココロ言コト○詞コトバの詞につきて其音義學上の解を與ふべし

心ココロは古く心ココロと云へり、又コロコ、ロとも云へり、性氏錄に彦屋主田 心命神代紀に田 心命又中心眼

といふは目メ之ナ心ココロなり、心ココロとは凝り働より云ふ、古音は久ヒコヤの父音と於オの母音よりある、久ヒコヤ音に引付

くる象於音に窄スボむる象あるをもて古音は引付け窄むる象なり、凝水籠コルホリコルモ 隱瘤コブなど皆引付け窄むる

義より出たる語なり、言コトのユユ前云ふごとく心ココロ也、トは跡アトと云ふ説なれど非なり、又通畧延約にて

説きし如く天アメを青見アチミ地ツチをつゞき地ヒダなど云はゞ、然らば青は見ミは幾何にもつめたらばいかんと同

じく、コトコトのトトもアトアトの義とせばアハトアハト幾何と云はゞ窮するならん、之れを音義にて説けば即登

音は都トと於オ音との合併して生せる音にして、都音の約ツマる義と於オの窄スボる義と合し又固カタマりたる未義もあ

り、戸所止綴富トのトトもトトと異事言コトの同音語とも比せば其義明なり、

詞コトトトは已ナに説けり、ハは作用なり波音には其父音不フに含む象母音阿アに分る、象あり、故に含みた

る者の分る、義あり、葉羽ハ及春張晴花ハルハルハルハル等同じ、故に言の一つ一つが体言となりたるが波音の加はれ

は作用となる、木葉の二葉より繁り鳥の羽にて飛ぶが如く千々に轉ウツリヘダラ用くをコトバとは云なり、他の例を擧ぐれば助辭の波も合へる物含める物を分つ義あり、父は善と云へば子は悪とかく父子を善惡二つに分つ、又彼は憎むべしと云へば是は愛む意となりて彼と是と愛憎を分つが如し、此にて音義學の何たるか又如何にして言語を解く可きかを覺りしならん、今前に示せし書籍及其他によりて、更に五十音圖の事より説くべきなれども、先助辭の各自の本義又は必らず異音を有することを、古歌を證として更に項を新にして詳説せん、

島津齊彬時代に於ける薩藩の教育

第一 緒言

吉 田 清 志

薩藩に於ては第十六代義久、(永祿七年八年之際承統 文祿四年傳純千義弘)第十七代義弘、(永祿四年承統慶長 七年傳統千家久)以後専ら士風を獎勵しければ、徳川氏治世の間會て士氣の修練衰へず、實踐躬行の學に従ふもの多かりき、殊に第廿五代重豪は、識見深遠にして雄略偉籌を蘊蓄せる人傑なりしかば、安永二年幕府の聖堂に摸し、造士館武演館を創立し、熱心に學問武藝を獎勵せしを以て、學理の探究精神の鍊磨、益々隆盛を極めたり、されども第二十六代齊宣、第二十七代齊興の兩代は、天下の風潮に伴ふて學問教育稍萎微し士氣衰ふるの傾ありしが、第廿九代齊彬(嘉永四年 二月承統)家を繼ぐに及び、文武の修練再び勃興し藩内の士風大に革まれり、蓋し從來の藩學に弊風あり學者徒に程朱學のみに泥み、迂遠の説を株守して好んで